

父よ許し給え



大野正重

父の姿を最後に見た場所は上野駅だ。昭和二十年二月のある朝である。

私は学童集団疎開に参加するので、信越線に乗らなければならない。家が池袋にあったので親兄弟の見送りは池袋の駅まで、と学校からは言い渡されていた。池袋から省線（山手線）に乗って上野で乗り換える。

当時東北、信越方面へのターミナルは上野駅だった。学校からの言い渡しなど、どの親も無視して上野まで見送りに来ていた。学校でも或る程度は予想の範囲内だったろう。空襲の激しさからいえば、これが最期の別れになる可能性が大きかった。事実父と私とはこれが最期の別れになった。違反だと文句を言う教師はいなかった。

ただおっぴらに別れを惜しむことは出来ない。物陰でそっと我が子を抱きしめる母親が多かった。表面は軍国主義の厳格さを装いながら、内実は昔ながらの人情的是からいという、どこか大岡政談にでも有りそうな状況だった。わざわざこんなこと、当たり前すぎて書くまでもないだろうと思われる向きも多かろう。私もそんな人情話を書く気はさらさら無い。

父の姿を物陰に見つけたことが、私にとっての事件だったのだ。父は私に対しては、厳格もいい加減にしろと言いたくなるほど厳しい態度で臨んだ。学校の決めた規則に違反することなど、絶対と言っていいほど許さなかった。その父が物陰から私を凝視していた。規則の裏を潜るとか、大袈裟に言えば法を破るとか、そんなようなことほど父の性格にそぐはないことはなかった。

何故父がそこにいるのか、普通の子なら駆け寄って別れを惜しむところだったろうが、しかし私は気が付かないふりをしてそっぽを向いた。冗談ではない。ようやく父から解放される、千載一遇の機会に恵まれたのだ。此処で引き戻されたりしたら元の木阿弥ではないか。これ程までに父を恐れ離れたがったのは、父の仕事と、末っ子で長男という私の家族内の立場、さらに私が二歳の時に罹った、小児麻痺による左足の下肢損傷が遠因と思われる。

私は父が四十四歳の時の子供である。上三人は姉で、すぐ上の姉とも七歳離れている。もう一人姉がいたらしいが、幼児の時に亡くなっている。もしこの姉が生きていたら、四人の姉が私の上で、どっかと睨みを利かせていたであろう。しかしやがて私は、昔流に言えば大野家の家長になる立場の男子として生まれた。

母は四十歳、私を収めた大きいお腹を抱えて歩くことを恥ずかしがったそうだ。父は、亭主持ちが妊娠して何が恥ずかしいか、私は亭主持ちですと書いた看板を首からぶら下げて歩くかと、母をからかったそうだ。現代（平成21年）ならこのくらいの親年齢など珍しくもないが、当時としてはやや高年齢の出産ということになるろうか。平均寿命が五、六十歳とすると、無条件歓迎の子であったかどうか、私は昭和九年（1934年）の生まれである。

父は美術工芸作家と職業欄には記入していたが、金属彫刻作家と言う方が正確だろう。つまり仕事場は自分の家だ。一日中顔を会わせている。この関係が父と私の関係にかなり絡んでいるに違いない。

時代背景も良くなかった。私の生まれた時にはすでに満州事変が起こり、やがて日中戦争に広がる気配を見せている頃だったのではあるまいか。芸術に携わる者としては良くない時代であったろう。せつかく生まれた後継ではあるものの、無事に育てられるかという不安は有ったであろう。

昭和十九年の秋口からB29による空襲が頻繁になり、朝晩続く空襲を、せめて子供だけでも避けさせるため、この年十月頃から第一次の学童疎開が始まった。

父はその時には私をそれに参加させなかった。何故かは分からないが、多分様子を見ていたのだろう。この戦争の成り行きに明るい未来を見ていた大人は、厳しい言論統制にもかかわらずおそらく一人もいなかっただろう。何しろあっちで転進（退却のこと）、こっちで玉砕（全滅のこと）という報道があった後で、何々沖海戦で敵空母何隻撃沈、戦艦何隻轟沈の大勝利のニュースが続く。なのに空襲のときには艦載機まで飛んでくる始末だ。空母を沈めたのに何で艦載機が何十機も飛んでくるのか。大人だったら、早晩、停戦の話が敵と行われるだろうと予想しない方がおかしい。そんな

状況を父は見ていたのだろう。

それとは別に、父は自分の病を知っていたのではないかと思われる節がある。胃ガンである。とすると覚悟しなければならぬような痛みが、何度も父を苦しめたであろう。後援者でもあり、話し相手でもある医者もいた。その医者に或る程度の症状を知らされていたのではなかろうか。胃ガンであり、余命も長くはないと。そのことを母や姉達に話せたのだろうか。

母は父が胃潰瘍の手術を受けたと私に話した。そこから彼女の話はバラバラになってくる。お茶の水の順天堂病院で手術を受けた。そして池袋の家に退院してきたのだが、空襲で担架に乗せて逃げ出したとき、傷口が開いて大出血、立教大学の庭に運んだが其処で亡くなった。この話には亡骸をどうしたかについての結末がない。そこが信憑性に欠ける。

家で吐血したことは確かなことだろう。姉の一人は、慌ててトラックに乗せて順天堂病院に運んで手術したが時既に遅く絶命した、と話した。そんなところが相場だろう。病院に運ぶためのトラックを探すのに苦労したというところにも、この話の信憑性がある。空襲の激しさが彼女達の記憶を混乱させていることは大いに有りうることだ。吐血、入院、手術、死亡の四点だけが共通点だ。その間に何が入り、順番がどう変わろうとそれを責めることは出来ない。父の遺骨は、駒込の吉祥寺に有る順天堂病院の合同供養塔に葬られている。で雑司ヶ谷の我が家の墓には、父の髪の毛と爪が入っている。

いずれにせよ、我が家は形式的にはあってもメソジスト派のクリスチャンであったから、墓にはそれ程こだわることはない、はずなのだがお盆になると姉弟のどちらからか墓参の話が出て、雑司ヶ谷に行くことになる。祖霊崇拜の民族的習慣から脱却するのはなかなか難しい。

さて話を昭和二十年の晩冬の上野駅駅頭に戻せば、父にとっては最期の別れを覚悟の上での見送りであったろう。私に伝えておきたいことは種々あったに違いないが、何しろ九歳と数ヶ月の子供に何を言っても始まるものではあるまい。その上私にとっての父は、災難であり疫病であり、看守であり、とにかく彼から離れて、彼を意識せずに暮らせることほど幸運な事はなかったのだから、この食い違いはどうしようもない。

父の病については、私が三十歳を越えたくらいの年の定期健康診断のときに、医師に肉親に癌になった者の有無を問われた。父が胃潰瘍で手術を受けた経緯を話すと、あ、それは胃ガンですよ、といともあっさり断定され、そうだったのかと思ひ当たるが多々あった。痩せぎすの身体、青白い顔色、不機嫌にしかめた表情、それらの現象と病とはつながっていたのだろう。自制心の弱りからどうしようもなく私を叱ったことも有ったに違いない。

更に言えば私は造形的な才能や感性を父から受け継いでいなかった。図画工作、習字のような手先の仕事に類することは、不得手であり不器用であり、要するに下手くそだった。世に言う不肖の子である。

そして多分、父は自分の納得する作品をまだ作っていなかった。三人いる姉の誰かには観音像を作りたいと話したことがあったそうだ。形式的にはあってもプロテスタントのクリスチャンである父が、観音像など彫って良いものだろうか。仏師と呼ばれる人達との関係はどうなるのか、その辺のことは門外漢の私には分からない。

多分父は、自分で満足できる作品のモデルを探していたのだろう。だが自らの病から来る余命と、連日連夜の空襲の中では、たとえモデルが見つかったとしても、その完成は不可能だったろう。そう覚悟しなければならなかった父の無念さを、近頃推察できる年齢になった。七十歳を過ぎての推察では遅すぎると言われようと、何も分からぬままでのよりはましだろう。

工芸作家としての焦りのようなものが、父の私への不機嫌に結びついていたらしい。だがそれは、十歳にも満たない年齢の私に、理解できる事柄ではない。どうしても自分の思うような文章が書けない、間もなく七十五歳になる私自身の経験から、ああ、これだったかも知れないと、ひょいと思ひ当たったのだ。その経験の積み重ねの年数が、父の不機

嫌になる事情の理解には必要だったらしい。

もし父が今の私の年齢まで生きられたら、そこそこの有る彫刻家になっていたかもしれない。なにしろ作品を造り、それを売って家族を養っていたのだから、一人前の作家であり、芸術家ではあったのだ。御所人形、枝葉付き葡萄の置物、蘭の置物、鮎や梅の帯留め、中には鏡餅に伊勢海老を備えた置物まで作っていた。注文ならそういう俗っぽいものまで作らねばならなかったのだろう。その意味では、父は立派なプロだった。

私は本を読み、文章を書くことが好きだが、それを職業にする気も自信も無かった。というよりも、そうしなくても生きていける幸運が、私を怠け者にしたかもしれない。

私の出身大学は、教員養成を目的としていた。その昔、師範学校と呼ばれていた学校を幾つか寄せ集めて、学芸大学と名付けたのだ。当然義務教育に携わる教員の養成が、主たる目標の大学である。当然国立大学である。私立の大学に進学させるほどの余裕はさすがの姉達にも無かった。

それはそれとして、小学校の教員免許状を得るための単位の多いことと云ったら、種類も時間も、うんざりする程詰まっていた。免許状を取るのが一番難しいのは、小学校一級のそれだ。これを取るため、何せ全教科を一応こなさなければならぬのだから。

小学校一級の免許状と中学二級の免許状は同時に取得できた。だが小は全科、中は専科制のため、国語科、数学科、社会科等の科目別のクラスが存在した。私は国語科乙類に入った。

小学校一級免許状取得の甲類クラスが三クラスと、中学一級免許状を取る乙類クラスが一クラスあった。私が入ったのは乙類クラス。中学一級の免許状は高校二級の免許状も兼ねていた。高校一級の免許状は、新卒には取れない。実務を何年か経験した上で試験を受けられる。そんな制度であった。大学の教員には免許状がいらぬ。そのくせ一番難しい小学校教諭の給料が一番安く、大学の先生のそれが一番高いというのは矛盾していた。私の知る限り、教え方の一番上手なのは小学校の教員で中、高、大の順に下手になる。そして給料はその逆という矛盾は、今も続いているらしい。

私はもともと義務教育の教員には成れない身体だった。足が不自由で、学童や生徒と一緒に走り回れない。だから高等学校の教員を狙っていた。前述の免許状の関係で私は高等学校二級の免許状を持っていた。免許状を持っているからといって、すぐに教員になれるわけではない。それぞれの都道府県の教育委員会が、定員の状況を睨んで採用試験を行う。この試験に合格しなければ教員に成れない。これが第一段階。

次に欠員の生じる学校から面接の通知が来る。校長や教頭が、この新卒を採用しようかどうかと、ねちねちごたごた質問するわけだ。義務教育校では、まあ大抵はこの段階で採用が決まる。

古狐共が都心近くか自宅近くに移動するから空席ができる。空席は直ちに埋めなければならない。次年度の授業に差し支えるから、多少のことには目をつぶらざるを得ない。そんなわけで、新卒は東京の周辺部か島嶼部に回され、それに不満がなければ決まりで一件落着。

ところが高校の場合は事情が変わってくる。高校に進学するもの自体が、そのころ（昭和33年頃）には少なかった。したがって高校も少なく、教員数も少ない。よって採用人数が少ないのだ。専門学科にもよるのだが、数学や化学、物理、生物等は結構空席が有るのだが、国語、社会となると希望者が多く空席も何故か少ない。競争の倍率は大学入試どころの騒ぎではない。私の採用試験の時は確か五十倍という噂だった。倍率は公表されないから本当のところは分からない。今、平成二十一年の世の中も就職難のようだが、私の卒業した昭和三十三年も就職難だった。

だがどんなに倍率が高かろうと、採用試験を受けないわけにはいかない。その道しか私には無いのだから。で、受験したのだが、参った。さすが高校教師希望者対象のテストだけあって難しい。なにやら和歌の入った古文が十数行並んでいて、この文章の題名を当てろとくる。和歌が入っているのは平安朝の文章としては珍しくないから、題名を決め

手がかりにはならない。といって、源氏物語とやるのは安易に過ぎるだろう。おまけに読んだとはいうものの、原文通読はとてとても、谷崎源氏を通してやっと読めたくらいだから、内容など覚えているわけがない。内容からして伊勢物語ではない。

何か歌物語ではあるまいかとは思ふものの、そんなものを読んだ事は全く無い。ええい、ままよと大和物語と名前だけ知っていた作品名を書いた。出たところ勝負の行き当たりばったりそのままの答案だ。ミンコウニツソ（眠江入楚）について説明せよ、これはいただきの問題だった。細川幽齋の書いた源氏の注釈書だと、最近の講義で聴いたばかりだったから。孟子らしい漢文の一部を書き下し文に直せ、辻褄合わせだから、書いた自分にさえ、意味が遠くに霞んでいて、何の事やら定かではない。

こんな状態の答案じゃあ受かるわけがないと思っていたら、なんと合格の通知がきた。ただし合格にもAとBが有り、私はB合格である。運が良かったとしか言いようがない。この上Aにしろなどと文句を付けたら罰が当たる。Bだろうとなんだろうと、合格しちまえばこっちのものだと多寡を括っていたのが間違いで、待てど暮らせど都立高校からお呼びがかからない。

小学校を受けた連中は、続々と就任校が決まっていく。そのうち四国のさる県立高校からお声がかかった。何故だろう。合格したのは東京都の高校だったはずだ。それがどうして四国から話が来るのだろう。さすがに四国に行く気は無いので断った。

それにしろ、何処かに就職しなければならない。長姉の知り合いの紹介で「帝国地方行政学会」という出版社に入れて貰った。編集の仕事には興味を持っていたが、この会社は「官報」を原稿にして、そのコピーを学校やら会社やらに、定期的に配布販売する出版社だった。国会が開かれれば、何か新しい法律が出来たり、変わったりする。それが官報になって届くのだから、作家だの雑文家だのという、わが憧れの先生方には、全く無縁の出版社だった。

この会社に勤めて二十日ほど経ただろうか、都立航空工業高等学校と言う学校から会いに来てくれという連絡があった。来たかちょうさん、待ってたホイと喜んだ。案内には、上野広小路から南千住汐入行き都バスに乗り、航空工業前で下りるとある。便利なところのようだ。早速休暇をとって出掛けた。案内通りにバスに乗る。我が家は世田谷区新町の都営住宅だった。

駒沢の隣町である。その頃にはまだ玉川通りを、芋虫に似た緑色の玉川電車、略して玉電も東急のバスも通っていて、このどちらかで渋谷に出る。渋谷から浅草行きの地下鉄に乗ると、上野広小路を通る。だから乗ったのだが、このバスのルートが上野駅、稲荷町、田原町と続く。つまり広小路から田原町までの四つの駅、いずれも都バスと連絡していることが最初に分かった。田原町で国際劇場（あの頃はまだ劇場が存在していたのだよ）方向に左折し、その前を言って言問通り、これを右折しすぐに千束通りを左折、これは多分、昔の吉原へ行く道ではないかと思っていると、これがズバリ正解。土手通りから吉野通りへ右折する、その交差点の名前が吉原大門なのだ。樋口一葉の（たけくらべ）の冒頭にも書かれている、由緒正しき見返り柳まで揃っている。

吉野通りを左折すると間もなく涙橋、地名からして穏やかでない。そう、この辺りが江戸時代には小塚原の刑場跡。この辺一体はつい最近までサンヤと呼ばれ、現在は清川と街の名前が変わっているが、西の釜が崎と並ぶ、その名も高いドヤ街である。涙橋で交差しているのは明治通りだが、此処は曲がらず次の信号を右折する。

曲がって左側はずっと隅田川駅の構内。なに、そんな名前の駅は知らない？そうでしょ。そうでしょ。あたしだって初めてだったもの、こんな名前の駅が有るなんて。貨物駅だ。新橋の裏か表か知らないが、その名も汐留という貨物駅が有ったらしい。これから行くあたしの目的地が汐入だ。まぎらわしいったらありゃしない。

その駅から何本も線路が出ていて、常磐線に接続しようと大踏切ができています。一度閉まると二十分は開かない。よってバスは南千住の駅には立ち寄らない。もちろんバス停もない。駅前にバス停のない国鉄（当時）の駅なんて他に有ったのだろうか。右折するところのバス停の名前が南千住駅入り口。ここから駅まで、足の速い人が歩いて五、六分はかかりますよ。

おまけに大踏切を渡ったらガードを潜り、右折しなけりゃ駅には出られない。その上この道が湾曲していて、曲がり

角から駅を見通せない。慣れればなんてことはないが、初めての素人には、結構難しい道筋ですよ。この入口から五つ目の停留場が航空工業前だった。次が終点汐入らしく、先発したバスがぐるりと旋回しているのが見える。袋小路なのだ、ここは。我が家から一時間半はたっぷりかかっただろう。乗り換え二回さえ気にしなければ、確かに便利なことは便利だ。

だが東京の辺境中の辺境、街全体が袋小路の中にある、他の何処にも行き場のない、どんづまりであることもまた確かだった。

バスを降りて校門に入る。玄関右手に事務所があり、来意を告げると応接室に通された。待つほどもなく一人の人物が現れた。額が広く顎に向かって頬が細くなる、優形(やさがた)だが引き締まった顔つき、立ち上がって迎える。

「教頭の山本です。どうぞおかけになって下さい。ずいぶん辺鄙なところで驚かれたでしょう」

「いえ、そんなことは…」

と言いながら、本心は大いに驚いていた。

「実はあなたにお会いする前に、同窓の畑山さんにお会いしたのですよ」

と仰せだ。畑山君とは同窓というより同級生で、よく在学中は教室で顔を合わせたのが、こちらは演劇部と麻雀に熱を上げ、向こうは漢文専攻の生真面目一辺倒の学生だったから、あまり話を交わしたことはない。

しかし彼の親父さんとは、浪人中、駿台予備校で顔なじみだった。といっても個人的に親しかったわけではない。畑山先生は周囲の毛を残して前額部、頭頂部、後頭部が鮮やかに禿げていた。見事なまでにつやつやと輝き、先生自身もこの禿頭が自慢だった。卵の白身だかを使って、念入りに磨きをかけるのだそうだ。冗談の上手い陽気なお年寄りだった。

習ったのは古文か漢文だったのだろうが、忘れた。大学に入った時畑山君を見て、面差しがよく似ているので、聞いてみるとやはり親子だった。小金井の駅を下りて校舎まで歩く間に彼の家があった。だから帰りがけに新宿に誘って、一緒に一杯やるチャンスもなかった。

「畑山さんは大学院に行って勉強を続けたいので、此処は少し不便ということで、あなたにお会いすることにしたのですよ。」

なるほどそれで時間が掛かったのか、それにしても畑山君、良くぞ断ってくれた。そうでなければ面接の機会がもっと遅れたか、或いは立ち消えのまま行政学会に燻っていなければならないところだった。何しろ彼はA合格、こっちはB合格なのだから。

「ところで貴方は卒業論文に何をお書きになりましたか」

それは聞かれると思っていた。何しろ国語の教師になるわけだから、語学系か文学系か、ぐらいいは確かめられるだろうと覚悟していた。

「寺田寅彦の文章について書きました。」

「それはまた何故ですか。寅彦とは珍しいのではありませんか」

当然、珍しいさ、漱石の弟子とはいえ、彼は随筆しか書かなかった。漱石とか鷗外とか竜之介とか、その頃流行の太宰治とか、周りの友人はそんな作家論を書いていたらしいが、そんな研究は掃いて捨てるほど有って、しかもそのどれもが、我々の力では到底及びも付かない、段違いの高級品であるのは分かり切っていた。低級な真似書きか、下手すると盗作になるような物しか書けないのは口惜しい。

うまいことに、我が家に中の姉が買い揃えていた寅彦全集が有った。それが寅彦をテーマに選んだ一番の理由だった。特に寅彦が好きだったわけではない。

「寅彦は物理学者ですが、彼の随筆は漱石譲りの名文です。彼の中で科学と芸術が融合していると思われました。これからの文学は、やはり科学との融合を心がける必要が有ると思い、寅彦をテーマに選びました。」

と答えた。まんざら口から出任せの嘘ではない。このくらいの応答の覚悟がなければ、たかが五十枚程度の卒業論文とはいえ、そう簡単に書けるものではない。

「嬉しいですね。実は私は物理を教えているのですが、国語の先生にそういう風に理解して戴けるとは思っていませんでした。」

やったね、まぐれ当たりもここまで来るとむずがゆくなるほどだ。そこへ校長が入ってきた。ダブルの礼服を着ていて、教頭が立ち上がって迎えたので、それと分かった。で、こちらも立って会釈をした。

「そのまま、そのまま、」

と手で押さえる仕草で我々を座らせて

「山本先生、お話はすすんでいますか？」

「は、そろそろ…」

「ところで、貴方は泳ぎはいかがですか」

これは意外な質問だった。

「遊ぶ泳ぎなら得意ですが、競争はできません。足が悪いものですから」

「それで結構なんですよ。本校は一年生の時に水泳訓練をするのが伝統でしてね。…では山本先生おあとはお任せします。宜しいように」

国語の教師の採用にまさか水泳が関係しようとは思いがけなかったが、答えの通り水泳は嫌いではなかった。この面接、上手くいきそうな気がしてきた。多分今の校長と教頭の何気ないやりとりの中に、面接の結果に対する質問と、それへの答えが行われたと思われる。はたして

「では、大野さん、貴方に来て戴くことになると思いますが、あなたの前任者の方の行く先が、まだ決まっていないので、其処が決まり次第連絡を差し上げますので、その時は就任されるつもりでおいで下さい。ああ、それまでは今お勤めの所をお止めにならず、勤続しててください。年金の関係が有りますので」

という成り行きで、高校就職が九分通り決まったのであった。目の先がぱっと明るく開けた心持ちだった。つきはまだ落ちていなかったらしい。だが、ここでほっとしたことが良かったか悪かったか。

都立航空工業高等学校という校名だった。今は無くなってしまったから、校名を明らかにしても差し支えあるまい。私にしても初めて知る校名だったが、そんなことは関係なし。取り敢えず都立の高校に職を得られたことが、何よりも嬉しかった。

文筆で身を立てようという意志が、この瞬間だけたことは間違いない。だが、父の心配したのは、私が一人前に生活していけるかということだったろう。それで三人の姉に、協力して私を大学に入れるように遺言したわけだ。

遺言は正解だった。中の姉が、特に頑張って大学に入れてくれた。長姉は母と私の生活を中の姉とともに支えてくれたが、大学の学費にまでは手が回らなかったようだ。学費そのものは奨学金で間に合ったのだが、その他諸々の雑費が大学生ともなると必要になるのだ。三番目の姉は、早くに嫁に行ってしまうと、このころは一緒に暮らしていなかった。

中の姉は英文タイプを習い、タイピストとして米軍に雇われ、結構な給料を稼いでいたようだ。この姉達のことは、感謝と共に稿を改めて書かねばなるまい。とにかく姉達のお陰で、高校教師の職にありつけた。父もここらで安心したことだろう。月給一万コロンデ九百円であっても、とにかく姉達の厄介者になる心配だけはなくなった。父の遺言は、姉達にとっては、重くのしかかる頭痛の種だったろう。

都立高校の教員になれば、取り敢えず生活の心配はなくなる。私の衣食住の心配をしなくて済むわけだ。私にとっても、心の何処かに、姉達の足手まといになる心配が有ったらしい。ほっと安心して力の抜けたのはそのせいに違いない。

食っていける、という目安がつくということは、当時としては大したことであった。何しろ食物にしる、金にしる、人間そのものにしる、ありとあらゆる物を使い果たしたあげくの敗戦だ。食べる、食物等の単語に対する我々が世代の敏感な反応は、他の世代とかなり違う物がある。

それは「生きる」ということに対する反応にも、直通している筈だ。生きることは食べることだという、生（これも

改めて書かずばなるまい) そのものの実体を、かなり早い時期に知ってしまった。それは善悪を問う、はるか以前の問題であろう。生きること自体が、絶対的な価値を持つということなのだ。

お後のことはどうにかならあな、という人間としては最低の認識が、そこに居座る。美とか芸術に対する認識に辿り着くまでには、ここからは、かなりの努力と時間が必要になる。ほっとしたり、力が緩んだり、怠けたりしたくなる必然性が、充分すぎるほど身の回りに溢れている。この環境に浸りきる者と、「だからこそ」と抗う者との二種の人間が出来る。時代の業(ごう)とでもいうべきか。

教員としての職業意識は、逆説のようだが、食う為の仕事として強く、出来るだけの努力を注いだつもりだ。その頃だったろうか、「でもしか教師」と言う言い方で、教師を馬鹿にした記事等が横行していた。「教師にでもなるか」連中とか「教師にしか成れない」連中というわけだ。この分類でいくと、私は差し詰め後者になる。

私としては、そういわれても傷つくところが殆ど無い。それほど大会社に入ったり、上級公務員になることに価値が有ろうとは思わなかったし、そういうなら公立学校の教員になってみる、みごと合格出来る奴が何人いるか、実験して貰おうじゃないか、その上で言いたければ言うがいい。

その程度のプロ意識は持っていたような気がする。聖職等という意識は全く持たなかった。それは、お坊さんか牧師さん神父さん、ユダヤ教やイスラム教の指導者等に対する敬称の類で、一般教員には当てはまらない名称だと、私は思っている。だからといって、破廉恥なことを許される筈もないのは当たり前だ。ごく普通の一般人で、専門分野の知識の量が、多少普通の人よりは多い、というくらいの者に、聖職はないだろう。

この程度では、父のプロ意識に敵うはずが無い。また教員という仕事が、好きで好きでたまらないという意識とも、私の場合はかなり距離が有る。どう考えても、私は父に敵いそうもない。

そんな父と私との仲を裂き、工芸家としての父の将来性を奪った者を、私は憎む。戦争が悪かったという、こういうときの決まり文句を、私は使わない。責任を取るべき者、責任を取るべき制度に対する追究が、殆ど行われていないからだ。機会が有る度にこの責任追及を、これからも続けて文章化することはかなり難しいことになりそうだ。だが それらを振り切って、努力をすることで、父よ、貴方に対する私の憎悪、恨みの念をどうか許し給え。

貴方の息子より

了